毎秒の燃料使用量計れる新端末
8月より光英システムで販売

3年で3万台の販売計画！
既存ユーザ向オプション売も

大手TMSベンダーの光英システムは、最近のトラックにつけられている電子制御技術CAN－BUSデータを利用して毎秒の燃料使用量を計測できる新型車載端末「K250」（燃料使用量計測装置内蔵型）の開発に成功。今年8月から新型車載端末製品の出荷を開始することをあきらかにした。

運送会社・荷主からの要望を受けて開発したもので、従来型のデジタコ、車載システムがなくてもドライバーに省燃費運転を正確に指導できるデータ取得が可能となった。

CAN－BUSデータの取得により、エコドライブや安全走行の指導に役立つ、使用燃料量、アクセル、ブレーキ、速度、エンジン回転数などが2本の線を接続するだけで、すべて取得可能となる。

一部のトラックメーカーから発売された車載端末に燃料使用量を計測可能な製品があるが、自社のトラックだけでしか計測できないため、複数のメーカーが利用している運送会社や荷主はメーカー製の車載端末は実用に供しない物であった。

このため光英システムはメーカーに依存しない世界標準のCAN－BUSを利用して、トラックの走行速度、エンジン回転、使用燃料などを計測する装置を開発。メーカー6社の共通端子化が進み、端子とつなぐことでサービス供与が進んでいる欧州と違い、日本では従来、各社が個別に仕様を作り、仕様を公表しないため、この分野のIT化が遅れていたが、光英システムが丹念に各社の端子状況を調べあげ、このほどメーカーに寄らない車載端末開発にこぎつけることができた。

CAN－BUSとつなぐことで、0・1秒ごとの車輪速度と荷物の積載量、0・5秒ごとの燃料使用量、急ハンドル、急ブレーキなど、安全走行やエコドライブに役立つ情報が2本の線をつなぐだけで計測できる。ドライバーに事故防止の警報を適切に出すことも可能だ。

▼内蔵型の新型機は15万円で

ちなみにCAN－BUS装置の提供方法は内蔵型の新機種を含め2種類。

1つは現行車載端末への対応。

光英システムでは、配送システムの導入・稼働実績は800システムに及び、統合湯配送管理システムでは車両4400台、運行拠点150ヵ所にこれまで導入。多くのユーザーに、現行車載端末（K220）の導入が進んでいるが、このユーザーに対しては、オプション形式の燃料使用量計測装置として提供を図っていく予定。

また新規ユーザー（新車時対応含む）を対象に、K220に燃料使用量計測装置内蔵型を今年8月より販売。15万円で販売を開始していく。

▼システムの特徴と基本データ仕様は次のとおり。

動態管理の基本はドライバーの無操作運行、配送計画との連動、誤配送防止機能（運行モニタにアラーム音性、パトライト、モニタ地図×表示）、配車計画システムへの配送実績知識データベース（所要時間、距離）、車載端末起動通信方式による通信料の低価格化、CAN－BUS利用時の燃料使用量計測装置。

システムの仕様では運行履歴は6分間隔に取得（任意設定可）、エンジンON・OFF時にデータを取得、5分以上のアイドリング時にデータを取得、エンジンOFF後30分に終了データを取得、燃料使用量計測6分間隔（オプション装置）となっている。